

「わたしの教育記録」 特選作品発表！

全入選作品選評

今年度の「わたしの教育記録」特選作品を発表します。
その前に4人の審査員の方々から、入選作品についての選評を伺いました。

活動が積みかさなり確かな学力に つながることがみえる特選実践



東京大学大学院
教育学研究科教授
秋田喜代美さん

第50回の記念すべき年に、独創的な実践の記録が受賞をされた。特選は、英語という特定教科を中心にした実践記録である。だが内容は教科の範囲にとどまらず、教師の工夫により他教科ともつながった内容となっている。活動が積みかさなり確かな学力につながることがみえる実践である点も高く評価したい。

特選の江尻寛正先生の実践は、学級担任の立場だからできる小学校英語のあり方という逆転の発想が面白い。コミュニケーション能力を高めるようペア等の様々な活動の工夫とともに、教師自らが学ぶモデルになって辞書を引き姿を見せることで子どもも刺激を受け

て動き出す意義を見いだしておられる。授業ハウツーではなく、学び続ける教師のあり方を示している点で、他校の先生にも小学校英語を自分もこれならやれると元気を与える実践になっている。

今年は新採とは思えない記録で新人賞特選が生まれた。率先垂範、凡時徹底の美学をもって学級経営に取り組んだ宮本将輝先生の実践である。金魚袋でゴミ拾いや手形をつけた雑巾など、美学を明確にもち、具体的な独創の手立てが光っていた。

入選3記録はいずれも手堅い実践である。小学校部門、坂田みずほ先生の実践は、小学

校低学年の読書指導と言語活動の関連性を意識した興味深い取り組みとともに、効果を実証的にとらえている。中学校数学の山元光一先生の実践は、不完全な問題を使うことで考えさせる授業を創りだしていることが、生徒の記録の事実から伝わってくる。また、森脇啓仁先生の実践は、知的障がいのある生徒の可能性をICTで最大限引き出す試みであり、どの学校でも取り組める新たなあり方を示している。新採・新人賞の笠井悠先生の言語力を育てる学級経営実践は、教師の工夫を生き生きと感ずる実践であり、今後が本当に楽しみである。

熱意と工夫に富んだ実践の数々を 心強く拝見

応募作品を読ませていただき、一部の人に未だ根強く見られる「学校叩き」「教師叩き」を撥ね退け、懸命に日々の実践に取り組んでおられる各地の教師の方々の姿に触れた思いがある。そうした熱心な取り組みはベテランや中堅の教師の方々にも、新人・若手の方々にも見られる。教育界が大きな世代交代の時期に直面している現在、大きな期待と安堵感をもって今後の日本の学校教育の展開を見ていけそうで嬉しい。

特選の江尻寛正さんは教職経験14年の中堅教師。今後一層強化される小学校での英語教

育に「担任という立場を積極的に生かす」視点からの実践である。担任は子どもの一日の生活を見ているから好きなこと興味のあることなど実態がよくわかっており、また他教科での学習の様子もわかっている。そうした担任ならではのメリットを英語授業に生かすことにより、英語専科の教師とは一味違う授業にしようという優れた取り組みである。

の視点を持たせる、という「逆転の発想」を用いた実践が報告されており、興味深い。新採・新人賞特選の宮本将輝さんは教師生活2年目。「可視化」「遊び心」「率先垂範」をキーワードとした「徳を積ませる」教育を学級経営を通じて実直に追求しておられる。新採・新人賞の笠井悠さんは教師生活4年目。「周りの人の言葉を理解して自分に生かす」ことを目指す学級経営の実践、目配りがよく着実である。



兵庫教育大学前学長
梶田 叡一 さん

「何ができるようになったか」に挑む実践

学習指導要領は、「何を学んだか」だけでなく、「何ができるようになったか」を重視する方向にある。今回の受賞作品には、それを意識したものが多くみられた。大変心強い。

江尻寛正氏の「担任の立場をいかした小学校外国語活動」(特選)は、全教科担当ならではの強みを発揮する。他教科の内容と関連付ける。多くの時間を共にしているから、子ど



政策研究大学院大学
客員教授
永井 順國 さん

もたちの個性や興味に見合った会話を促すことができ。不安感が先立つ現場教員にとって、大いに参考になるだろう。

坂田みずほ氏の「読書指導と言語活動との

関連を図り伝え合う力を育む」(入選)も興味深い実践である。副題の「くらべて よんで つたえて ひろめる」のそれぞれを焦点化し、最終的には「使える日本語」を目指すものだ。社会人になっても役立つだろう。

意表を突くのが、山元光一氏による「不完全な問題を用いた学びの必然性のある授業」(入選)だろう。例えば数学の図形で、取えて条件を不足させた問題を出す。生徒は考え込

む。つぶやく。隣の者と話す。不完全な要素が生徒を学びに向かわせるという趣向である。数学的思考力を養う授業そのものである。

森脇啓仁氏の「知的障がいのある生徒の発表会『人生の振り返りと将来に向けてのステップ』」(入選)は、ともすれば自信を持ってない支援学校高等部3年生に、ICT教育を通じて、「過去を振り返り、現在の姿を直視し、さらに将来の姿を考える」内容をパワーポイ

教室の雰囲気・授業の様子が伝わる 実践記録が魅力

実践記録は、教室の雰囲気や授業の様子が伝わるのが大切です。今回の応募作品から、教室の子どもの声が伝わり、真面目な日々の積み上げが読み取れる質の高い実践記録に魅力を感じました。

特選の江尻寛正氏「担任の立場をいかした小学校外国語活動」は、外国語教育の指導力を高めることを目的にした実践をまとめられています。「わからないから教えられない」ではなく「わからない時には、こうすればよい」ということを教えることである」という言葉のような、10年を超える実践がないと生まれないであろう考えや方法がちりばめられた手堅

い記録でした。

入選の作品として、坂田みずほ氏の作品は、言語活動と読書指導が相互に関連すること大切にしたい実践で、よみくらべや辞典作り、豊富な資料の活用など、説得力があり、質の高さを感じました。山元光一氏の作品は、数学の「図形」領域の授業において、問題解決に必要な条件を全部示さず、不完全な問題を提示して考える力を育てることに着目をした実践でした。思考過程が分かる生徒のノートが魅力的です。森脇啓仁氏は、ICTを利活用して、知的障がいのある生徒に、成功体験をさせる発表会を計画し、成長の様子を見守

ント化させ、校内発表にまでこぎつける。内容は感動的だ。同時に、どんな校種の学校にも通用するヒントを秘めている。

新採・新人賞特選の宮本将輝氏の「徳」を可視化する学級経営」、新採・新人賞の笠井悠氏の「言葉が響き合う学級を目指して」は、いずれもフレッシュな感性と情熱的な実践ぶりがうかがえた。さらなる飛躍を期待する。



前・京都女子大学教授
吉永 幸司 さん

る姿が印象に残りました。

新採・新人賞特選、宮本将輝氏の作品「徳」を可視化する学級経営「遊び心」と『率先垂範』による導人的実践」は、一冊の本との出会いを大切に、凡事徹底・可視化・美学の意識などの言葉を生かした指導を展開し成果を上げた記録で、今後の活躍に期待を抱きました。新採・新人賞受賞の笠井悠氏は、自分の思いを言葉にして響き合わせる暗唱や二重跳び指導の事例から、勢いが伝わってき